

和歌山市晒山・総綱寺谷古墳群調査概報

関西大学考古学研究室編



(寺内63号墳の北方より総綱寺谷及び名草山をのぞむ)

和歌山市教育委員会

昭和44年4月

例 言

1. この概報は和歌山市教育委員会の依頼により，関西大学考古学研究室が行なった和歌山市大谷晒山所在の晒山古墳群のうち4基の古墳と和歌山市森小手穂所在寺内地区古墳4基の緊急発掘調査概報である。
2. 調査は2回にわたって実施し，第一次調査は昭和43年7月1日から8月12日まで行ない，第二次調査は同10月7日から10月21日まで行なった。
3. この概報は調査事実を速報したものであり，後日あらためて本報告で行なう予定である。その際，記述内容に若干の訂正を加える場合があるかもしれない。
4. 遺物及び図面は現在関西大学文学部考古学研究室で整理中である。

調査団の組織および参加者名簿

調査団団長 藺田香融
副団長 網干善教
顧問 末永雅雄 樋口隆康
参 与

(和歌山市文化財保護委員会委員)

田中敬忠 松田茂樹 宮田啓二 中村正寿
三尾功 森浩一 和高伸二

(県教育委員会)

小賀直樹 武部吉宏

(文化庁)

岡田茂弘

調査団事務局

稲垣優 塩路保雄 平原陸奥 竹光健次
田中輝夫

調査参加者

奥田豊	河上邦彦	笠井保夫	水口昌也
田中達夫	中井一夫	峯正明	久見由利子
岡田博	小川良太	佐々木和子	松岡幸子
村越直嗣	山本三郎	吉岡哲	今中元広
黄地修一	片岡妙子	琴塚啓子	田中堅一
直宮憲一	灰掛薫	藤原学	松本信夫
渡辺恵子	雨田稔	岡正之	堀田善弘
山形理一郎	高橋光子	高道直美	(以上関西大学生)

調査協力者

石野博信	藤井祐介	井藤徹	菅谷文則
櫃本誠一	(以上関西大学OB)		
中村晃	(以上関西大学生)		
津島彰夫	八百谷修子		

地元協力者

西本和広	松下広雄	藤斉正俊	坂本漸
山路治	南本吉一	池尾哲二	楠見小学校

土地所有者

目良道雄	南本一彦	伊澤亀七	小坂常男
------	------	------	------

1. 調 査 経 過

最近宅地開発が急速に進行している和歌山市内の採土地として、晒山古墳群が消滅の急迫にさらされ、また、岩橋千塚寺内地区の古墳も蜜柑畑開墾に伴い破壊されようとしていた。

5月28日、和歌山市教育委員会より関西大学に両古墳群の事前発掘調査の依頼があった。6月6日、市教育委員会からの連絡で大学では分布調査を行った結果、晒山古墳群の採土地域内に前方後円墳1基を含む3基の古墳の存在と総綱寺谷調査地域に4基の円墳が存在することを確認した。6月18日、市教育委員会よりの再度の連絡で現地におもむいたところ、すでに晒山古墳群の4号墳は土取作業が墳丘のすぐ近くまで迫っており、緊急を要すると判断し、まず晒山古墳群の発掘調査に着手することに決定した。

調査は、7月1日より草刈り作業と並行して地形測量から着手、7月6日より特に緊急を要する4号墳より発掘を開始し、7月31日、古墳4基のすべての調査を終了した。

総綱寺谷古墳は、7月29日より草刈作業に並行して地形測量を行ない、8月1日より寺内63号・6号墳の発掘を開始した。8月12日、予算の関係上発掘を中止し、これを第一次調査とした。

10月7日、追加予算が出たので第二次調査は寺内63・6号墳の残部の調査と並行して寺内32・28号墳の発掘を行ない、10月21日すべての実測を終えると共に調査部分を埋めもどし調査は終了した。翌日、一部は現地に残留し古墳保存に関して土地所有者との交渉を行なった。以上をもって7月1日より10月21日に至る通算58日間の現地調査を終えた。

2. 古墳の位置と環境

今回調査した古墳は紀ノ川北岸の和歌山市楠見に所在する晒山古墳群の4基と南岸の和歌山市森小手穂北谷に所在する岩橋千塚寺内地区の4基の古墳である。

まず、晒山古墳群は紀ノ川にそって東から西へのびる和泉山脈の南、背見山山塊に存在する。背見山山塊は紀ノ川の土砂によって、形成された沖積平野に小さく突出した山塊である。山塊の最高地点である背見山より長く南にのびた尾根が二つの支尾根に分れる地点に2号・3号墳があり、東支尾根に4号墳、西支尾根に1号墳があり、さらにこの支尾根の西方約150mの尾根上に大谷古墳がある。



● 古墳
▲ 弥生
× 縄文

- | | | | |
|-----------|-------------|-----------------------|-----------|
| 1. 大谷古墳 | 2. 晒山古墳群 | 3. 鳴滝古墳群 | 4. 奥出古墳群 |
| 5. 大同寺古墳 | 6. 花山6号墳 | 7. 大谷22号墳 | 8. 大日35号墳 |
| 9. 井辺1号墳 | 10. 群長塚 | 11. 知事塚 | 12. 將軍塚 |
| 13. 天王塚 | 14. 寺内18号墳 | 15. 寺内6, 28, 32, 63号墳 | 19. 鳴神遺跡 |
| 16. 宇田森遺跡 | 17. 太田・黒田遺跡 | 18. 井辺遺跡 | |
| 20. 禰宜遺跡 | 21. 岡崎遺跡 | 22. 吉礼遺跡 | |

この古墳は組合式家形石棺を納める前方後円墳で馬甲，馬冑を始めとして馬具，武具，武器，工具，装身具等の遺物を出したことで著名である。晒山古墳群はこの古墳をも含め，7～8基から成るものと考えられる。

東方約1Kmには鳴滝古墳群があり，これは後期の横穴式石室を主体とする古墳群で，特に1号墳では飾履・子持勾玉が出土している。さらに東方には奥出古墳群や大同寺古墳があり，特に大同寺古墳では須恵器の家形埴が出土しており古くから注目されていた。

次に寺内地区の古墳は岩橋千塚の南面に存在する。すなわち古墳は山塊の稜線上より南に長くのびた二つの尾根によって形成された通称総綱寺谷の奥にあり，二つの支尾根にはさまれ，小さく突出した尾根上に存在し，名草山を眺望する景勝の地にある。

63号墳は尾根の突端にあり，6号墳はその北に位置し，32号・28号墳はこの尾根の東斜面に築造されている。西方の尾根上には前方後円墳の寺内18号墳がある。この古墳は前方部，後円部の二か所に横穴式石室を築造した6世紀中頃の古墳である。さらに西方には和歌山における最大の方形墳で横穴式石室をもつ井辺1号方形墳が存在する。東方の尾根上では奈良時代の蔵骨器が発見されている。尚この周辺には他に小円墳が2，3基存在しているが，終末期頃の古墳と考えられている。

3. 調 査 の 概 要

(1) 晒 山 古 墳 群

1 号 墳

1号墳は，大谷古墳の東方約150mの尾根上に築造された円墳で，径約17m，高さ約2.5mで，岩盤が露出していることなどから封土はほとんど流失したものと思われ，築造当時の状態からかなり変形しているものと考えられる。

外部施設としては，埴輪が検出されたが，原位置を保っていたものは無かった。なおこの埴輪には総て赤色顔料の塗布が認められた。

内部施設は，墳頂部に岩盤を掘り込んで造られた粘土槨で長さ約6.5m，幅約1.5mで，主軸をほぼ南北に示していた。槨内からは，全面に赤色顔料を施した割竹形木棺の痕跡が認められた。

副葬品としては，槨外東において鉄製槍2，小型直刀5口を検出した。棺内中央部では直刀1口が切っ先を南に向けて出土した。北端附近において百数十個の玉類を検出した。玉のうちわけは，勾玉3（翡翠製），管玉52（碧玉製），白玉116個（滑石製）である。

2 号 墳

2号墳は、1号墳と4号墳の尾根の分岐点上に築造された全長約30m、後円部径約17m、高さ約4m、前方部幅約10m、高さ約3mの前方後円墳である。墳丘は、地山を整形して築造され、封土はほとんど流失している。

外部施設は、後円部北の基底部と考えられる位置より円筒埴輪が並び、埴輪列の墳丘側より直弧文を持つ盾形埴輪と家形埴輪の一部が出土した。また、前方部基底において幅約1.0m、深さ約0.6mのU字状の堀状遺構が検出された。

埋葬主体部は後円部にて表土直下より須恵器壺、短頸壺各1が出土し、その底部に赤色顔料が附着していたことから、すでに流失したものと考えられる。前方部では、主軸に直交して二箇所に岩盤を堀り込み、内に木棺を直葬したと思われる埋葬施設が存在した。南側の埋葬施設より切っ先を北に向けて刀子1口、須恵器の短頸壺と蓋のセットが検出された。北側の埋葬施設より須恵器（提瓶1、壺2、罍1、無蓋高杯1）、鉄斧1、刀子2などが出土した。

3 号 墳

3号墳は、2号墳後円部のすぐ北側にあり、封土は、ほとんど流失し河原石の残存する遺構として検出された。

この遺構は埋葬施設と考えられるが性格は明らかではない。ただ礫墓ではないかとも考えられる。なお、この遺構中より2号墳のものと思われる埴輪片が出土している。そのため、この遺構は2号墳よりも時期的に新しく、築造時に混入したものと考えられる。

4 号 墳

4号墳は、2号墳の南東約30m、標高約50mに位置する。墳丘は、封土が流失し全域にわたって岩盤が露出していたが径約12mの円墳である。

外部施設としては、墳丘の南側より石室を圍繞するような状態で幅約2.5m、深さ約0.5mのU字状の堀状遺構が長さ約5.0mにわたって存在した。この堀状遺構の北側で南北に約1.8mの長さに結晶片岩の石列が検出された。また、石列より東斜面において埴輪及び須恵器が散布していたが原位置を保っているものはなかった。この中には形象埴輪片も若干含まれていた。

内部構造は、岩盤をコ字形に堀り込み墓壙とし、結晶片岩の割石を小口積みして築造された横穴式石室でほぼ西に開口している。しかし、乱掘と流失のため石室はほとんど原形をとどめておらず、かろうじて玄室の奥壁と側壁下部石組の一部分が築造当時の状態を保っていたにすぎなかった。玄室規模は、幅約1.6m、長さは現存で約1.6m計測することができた。

また、奥壁中央部より排水溝が岩盤をU字状に堀り込んだ状態で羨道と考えられる方向のび、奥壁において赤色顔料の付着が認められた。

出土遺物は、ガラス製管玉1、ガラス製小玉4個と須恵器片若干を検出した。

(I) 岩橋千塚寺内地区

寺内 63 号 墳

今回調査した4基の古墳の中で最も南に位置する径約25m、高さ約4mの円墳で岩橋千塚では大型に属する。墳頂は盗掘等による破壊で若干変形し、また、西斜面は蜜柑畑に開墾されていたが、他の斜面は良好に残存していた。墳丘の大部分は自然地形を整形したもので北・南側いずれも岩盤を整形した痕跡が認められた。葦石は墳頂全面と東・南斜面に認められたが、盗掘で攪乱されていた部分がかなりあった。円筒埴輪は墳丘全面に破片が認められたが、樹立していたものは墳頂を円形にまわっていたと考えられる5本を認めたにすぎなかった。形象埴輪としては家形埴輪が検出された。なお、外部施設として墳丘南裾に板石を並列させた遺構が見られたが、何であるか不明である。

内部主体は、墳頂中央にはほぼ南北に粘土槨があり、平行して西側に木棺直葬のあとが認められた。粘土槨は赤色顔料を施した割竹形木棺を納めたもので、2か所に盗掘竈がみられたが、長さ約5.7m、幅0.8mであった。木棺直葬は箱式木棺を直葬したものと推定でき、長さ2.1m、幅0.6mである。葦石は粘土槨の上面には全く認められず、木棺直葬は葦石をはずした後に埋葬されていた。遺物は、粘土槨から棺内に鉄剣1、細根式鉄鏃42、平根式鉄鏃2、他に棺の柄に塗ったと考えられる漆を検出、また、三角板革綴短甲と冑と思われる破片が盗掘時に盛り上げられた土中から出土した。槨外では鉄槍1口を検出した。木棺直葬内からは鉄剣1、刀子1、竹櫛1が出土した。なお、墳頂から土師器高杯3個体が出土した。

寺内 6 号 墳

寺内6号墳は、63号墳の北にほとんど接して築かれた円墳で径約15m、高さ約3.3mを計測することがきるが、墳丘の西半分は蜜柑畑に開墾されている。墳頂には盗掘竈が大きく穿たれており、相当墳丘の変化が認められる。葦石や埴輪の樹立等は検出されなかった。ただ数片の埴輪が封土中から出土したが、63号墳のものと考えられる。内部構造は、南に開口する横穴式石室であるが、わずかに石室の平面プランを知ることができる程度にしか石組みが残っていなかった。石室は玄室、玄室前道、羨道からなる岩橋千塚通有のものであるが、羨門から地山をU字形に掘り込んだ遺構が墳丘外にまで続いて検出された。この部分は盗掘にあっていなかったが、天井石等はなかった。石室は全長約5.0m、玄室長さ約2.5m、幅約2.0m、羨道長さ約2.0m、幅約0.7m、掘込み幅約2.5m、長さ約6.5mで、玄室内には棺床と考えられる板石敷が長さ約1.5m、幅約0.5mで認められた。遺物は棺床上及びその附近から須恵器杯身、蓋、土師器杯、掘込み内から土師器及び須恵器の破片が検出された。

寺内 32 号 墳

寺内32号墳は6号墳と同尾根の北東約20mの斜面に築造され、今回調査しなかった上方の

7号墳と接しており、7号墳の流出土と盗掘及び斜面に築かれているため墳丘はほとんど目立たず円墳であるかどうか不明で、調査結果からも確認できなかった。しかし、一応尾根の突出した部分を計ると南北径約10mを計測できるが高さは明確でない。内部構造は南に開口する横穴式石室で、やはり盗掘で多量の石材が抜取られていたが、全長約4.2m、玄室長さ約2.1m、幅約1.6m、玄室前道約0.5m幅約0.7m、羨道約1.6m、幅約1.0mを計測することができた。また、玄室と羨道の一部には排水施設が検出され、羨道では床面が2層になっていることが確認できた。

遺物としては、羨道において上層・下層共に同型式の須恵器が検出され、上層は杯身2、蓋2、下層は須恵器杯、土師器壺1、杯身1と玄室内では右袖部から積み重ねた状態で須恵器3、土師器3、が出土した。さらに、石室前庭部から須恵器、円筒埴輪の破片等が検出された。

寺内28号墳

寺内28号墳は、32号墳と同一斜面上、北約15mにある円墳で、径約10m、高さ約1.5mを計測することができた。この古墳も他の古墳と同様盗掘をうけており、盗掘墳の一部に玄室奥壁の一部が露出していた。外部施設としては、調査前全く土砂のため埋もれていた馬蹄形掘状遺構が調査により明確に知ることができた。内部構造は東に開口する横穴式石室で、やはり盗掘で石材は抜取られており、奥壁と側壁の一部が残存していたのみで、石室のプランを明確に示すことができないが、部分的に残っていた床面や排水溝から石室の規模は石室幅約20m、排水溝長さ約5.1mを計測することができた。

さらに、羨門と考えられる部分に墳丘をまわるように約2m石材を乱雑に並べた遺構があった。遺物は、石室内墳丘より盗掘の際にほり出されたと思われる須恵器短頸壺1があるのみで、石室内より他に何も出土しなかった。また、掘状の掘込みの内部から須恵器、土師器片が多量に検出された。しかし、この中には古式須恵器から新しい形式のものまで含まれ、さらに弥生式土器の底部の出土もあった。

4. 総括

今回実施した二カ所8基の古墳の調査は、60日間にわたり、延人数1,200人を要した調査であったが、調査を無事終える事が出来たのは、市教育委員会をはじめ、地元の方々の好意あふれる協力のたまものにはかならない。記して感謝の意を表したい。

さて、今回調査を行なった古墳は前方後円墳1基、円墳6基、及び墳形不明のものが1基で

あるが、主体部が盗掘を受けているものもあったが盗掘の痕跡の無かったものがあり、この地の古墳文化を知る上で大きな収穫であったといわねばならない。二カ所の古墳群は多くの新知見と問題を提起することになったが、そうした成果について以下簡単に述べよう。

晒 山 古 墳 群

- (1) すべての古墳の内部構造が異なるがこれは築造時期によるものであろうか。
- (2) 埴輪は3号墳を除き一応出土したが、特に1号墳のものは赤色顔料が塗布され、また2号、4号墳では形象埴輪が出土していることは注目される。
- (3) 2号、4号墳では堀状遺構を持ち、2号墳では内部に須恵器が、4号墳では列石があったが、従来あまり知られていない遺構であり、岩橋千塚における終末期の古墳にしばしば見られるいわゆる馬蹄形堀状遺構との関係等も問題になろう。
- (4) 1号墳の粘土槨は完全なものとしては和歌山県では初めての検出であり、紀ノ川流域の古墳としては現在まで判明している古墳の内では最も早い時期の築造といえる。
- (5) 2号墳では前方部に二つの埋葬施設があり、多葬墳の類例を追加することができるとともに、後円部と前方部の時期差が須恵器の形式差から推定出来そうである。

寺 内 地 区 の 古 墳

- (1) 63号墳は粘土槨と木棺直葬の主体部であり、他の古墳より築造時期が早いものと考えられ、粘土槨のような古い様式を持つ古墳が寺内地区にも存在していたことは今後岩橋千塚の成立を考える上に重要な資料とされるであろう。
- (2) 1号墳の葺石は岩橋千塚で初めての発見であり、また板石を並べた遺構も他に類例がない。これらの性格はこの古墳の重要性を暗示していると考えられる。
- (3) 6号墳、32号墳は岩橋千塚で最も新しい古墳であり、終末の古墳を知る大きな手がかりとなろう。
- (4) 6号墳は墓道と考えられる掘込みの検出があり、32号墳では二回にわたっての床面が確認できた。これらは石室の使用についての手がかりとなろう。
- (5) 28号墳では馬蹄形堀状遺構が完掘でき、封土との関係、この遺構の用途を理解する上で、きわめて有益であった。

これらの問題点については本報告の際に詳述したい。また古墳の築造時期については、なお十分に検討せねばならないが、晒山古墳群では1号墳が5世紀前半から中頃で、2号墳は5世紀後半から末期、4号墳は5世紀末から6世紀、3号墳は2号墳築造後、と考えられる。寺内地区では63号墳は5世紀後半、28号墳が6世紀後半、6号墳、32号墳は7世紀前半頃から後半にかけての築造と考えられる。

最後にこの発掘調査は行政による緊急調査であったが、文化庁、和歌山市教育委員会、土地

所有者、及び大学等の関係者の話し合いにより古墳は次のようになった。晒山1号墳は、今後土地所有者と語合いを続け保存する。晒山2号墳は前方部と後円部で土地所有者が異なるが前方部は土地所有者の好意により保存でき、後円部は保存できるよう土地所有者と語合いを続けている。4号墳は調査中地割れのため消滅してしまった。

寺内63号、6号墳は土地所有者の好意により現状のまま完全に保存される。32号、28号墳については調査前より開墾が墳丘の一部に及んでおり墳丘を保存することは困難な状態なので石室のみ蜜柑畑の中に埋没させたまま保存することになった。

我々にとって必ずしも納得のゆく結果ではなかったが、最大の努力をしたつもりである。今回のように土地所有者個人の好意による保存では全面的な埋蔵文化財の保護、保存はなかなか難しい。抜本的な文化財保護対策が必要である。



晒山古墳群（南よりのぞむ）



晒山1号墳主体部

晒山2号墳
(前方部第1主体部)



調査風景



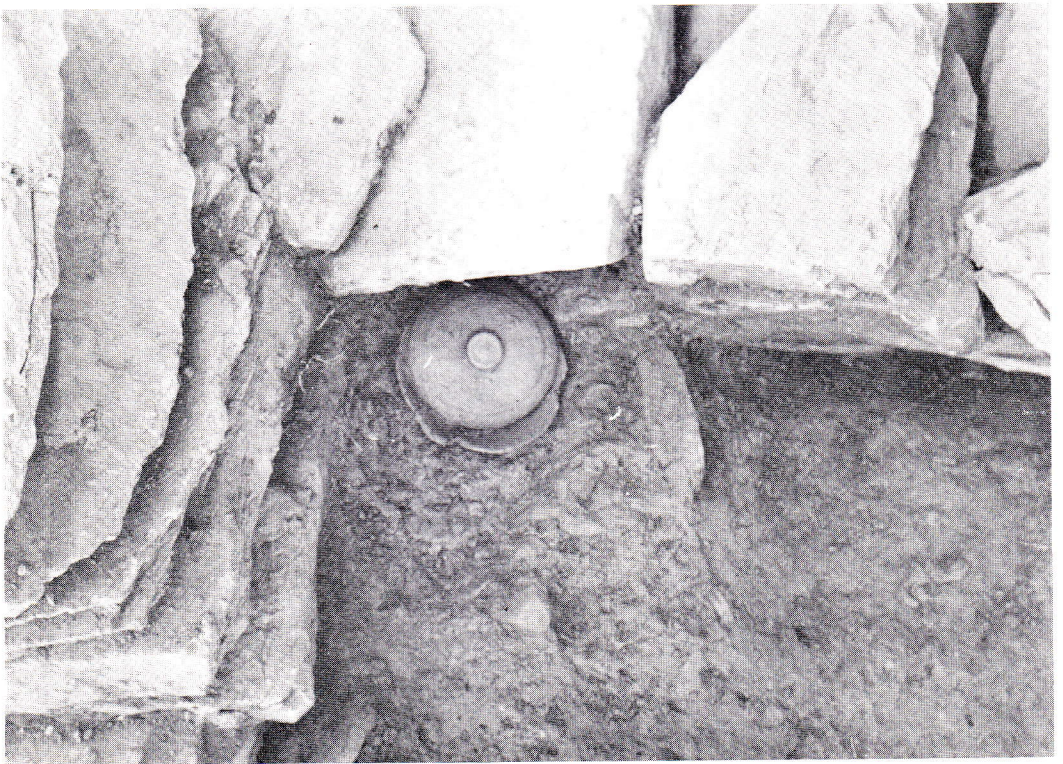
寺内 63号墳主体部



寺内 63号墳 墓石



寺内 28 号墳主体部



寺内 32 号墳遺物出土状態

昭和44年3月30日 印刷・発行

編著者 大阪府吹田市千里山
関西大学文学部考古学研究室
代表 藺 田 香 融

発行者 和歌山市西汀町一番地
和歌山市教育委員会

印刷所 大津市松本一丁目8の17
堤 印 刷 所

